

【要旨】

【題名】 薬剤師の在宅訪問によりパーキンソン病患者の ADL に大幅な改善が見られた一例

○初鹿隼人¹、若林優太¹、山中俊輔¹、濱島弘喜¹、黒澤雅俊¹、山川晃徳¹、深津英人²、
松井洸²、山口浩²、野村和彦²

¹ 杏林堂薬局、² ツルハホールディングス

【目的】

パーキンソン病は運動症状だけでなく、様々な非運動症状を伴う。そのため、より日常に沿ったケアが必要であり、多職種での在宅への介入が重要である。自宅で自分らしく過ごすために、薬剤師が多職種と連携し、在宅訪問することによって、日常生活動作(ADL)の大幅な改善が見られた一例を報告する。

【方法】

80代、男性。パーキンソン病、便秘症、両足白癬症。要介護2。Hoehn & Yahr 重症度 Stage III。生活機能障害度2度。奥様と障害のある息子の3人で生活していた。奥様が亡くなられた後、患者は自己判断で薬を服用するようになり、状態が悪化。室内では這って歩くことが増え、動けなくなることもあった。訪問看護師が服薬管理を行うも、改善は見られず。この状況を受け、薬剤師が服薬支援ロボの導入を提案し、1週間試してみることとした。

【結果】

5日後、全ての薬が適切に服用されたことを確認した。その後、患者の服薬状況は改善し、以前にはできなかった庭の手入れや畠の耕作が可能になった。訪問看護師からの聞き取りにより、緊急訪問回数の減少、排便コントロールが改善したことがわかった。

【考察】

服薬支援ロボットの導入により、服薬コンプライアンスの改善だけでなく、生活時間も規則正しくなった。それにより ADL は改善し、患者の希望である自宅での自由な生活を実現できるようになったと考えられる。

【結論】

薬剤師が多職種と連携し、在宅訪問を行うことで、服薬コンプライアンスの改善と ADL の向上に貢献できた。今後も多職種連携を強化し、患者や家族のニーズに応えるサポートが重要であると考えられる。

(第 17 回日本在宅薬学会学術大会 2024 年 7 月 出島メッセ長崎にて発表)